

『熱をもて 誠をもて』（『下商新聞』、令和3年3月1日）

校長 久保田 力哉

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。高等学校の全ての課程を無事修了することができたのは、一人ひとりがたゆまぬ努力を積み重ねてきた結果であることは言うまでもありません。

とりわけ、本年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大により、学習や学校行事、部活動などに多くの制約や変更が強いられました。このような逆境にあったにもかかわらず、見事に自らの進路実現を果たした皆さんの不断の努力と不屈の精神に、心から敬意を表します。

加えて、その陰には、深い愛情をもって見守ってくださった御家族の方々や先生方、友だちなど、多くの人たちの支えや励ましがあつたことも心に刻み、感謝の気持ちを忘れないでほしいと思います。

さて、昨年の上学期始業式で、1957年にノーベル文学賞を受賞した、アルベール・カミュの『ペスト』という作品を紹介しましたが、このペスト菌を発見したのが、「日本細菌学の父」として知られ、新千円札の肖像に選ばれた、北里柴三郎博士です。

北里博士は、肥後国、現在の熊本県阿蘇郡に生まれ、熊本医学校、東京医学校で学んだ後に、ドイツのベルリン大学に留学し、結核菌やコレラ菌を発見した細菌学の権威であるロベルト・コッホ博士の元で研究を重ねました。

この北里博士の言葉に、「熱と誠があれば、何でも達成する」というものがあります。博士は、大学時代に何度か留年するなど、決して抜群に成績の良い学生ではなかったようですが、常に熱を持って研究に没頭し、破傷風菌の培養と治療法の確立、そしてペスト菌の発見など、予防医学の進歩に大きく貢献しました。その結果、日本はもとより全世界の医療レベルを底上げしました。

卒業生の皆さんには、自分が今やるべきことを熱意をもってやり続けるという北里博士の姿勢を、是非見本にしてもらいたいと思います。

そして、この言葉には、続きがあります。それは、「よく世の中が行き詰まったと言う人があるが、これは大いなる誤解である。世の中は決して行き詰まらぬ。もし行き詰まったものがあるならば、これは熱と誠がないからである。」です。

皆さんがこれから生きていく社会は、AIやビッグデータの活用等の技術革新が目覚

ましいスピードで進展するなど、複雑で予測困難なものかも知れません。また、新型コロナウイルスへの対応についても、未だ課題は山積しています。

しかし、我々人類が有史以来創造してきた多種多様な文明は、平和で文化的な社会を構築するための手段に過ぎません。Society 5.0 と呼ばれる近未来社会も、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会であり、我々は、今後もこれらの道具に決して振り回されることなく、有効かつ適切に活用していかなくてはなりません。

また人類は、これまで多くの災害や疫病等に勇敢に立ち向かい、ことごとくこれらを克服してきました。現在、「ウィズコロナ」という言葉に代表されるように、経済や社会の大きな変化を、新たな仕組みづくりや価値観の創造へとつなげていくために、全世界で様々な取組が実践されつつあります。本校においても、感染症対策を含め生徒の皆さんを守るため様々な取組を行ってきましたが、卒業後は守られる立場から、自分で自分を守ることに加え、他者を守る立場も、今まで以上に要求されるようになります。皆さんは、これから学び舎を巣立ち、それぞれの新たな道を歩んでいきます。その道をさらに切り拓いていくためには、待ち受ける変化に受け身で対応するのではなく、主体的に物事にに関わり、一人ひとりが自らの能力を最大限に発揮し、よりよい社会を創るために努力することが重要です。どのような時、どのような場でも確固たる意思をもち、他者と協働しながら、熱と誠をもって困難に立ち向かい、見事にこれを克服してください。

終わりにになりましたが、保護者の皆様方におかれましては、お子様の御卒業、誠に御めどうございます。お子様の健やかな成長を願って支えてこられた皆様には、さぞや御苦労も多かったことと拝察いたします。この佳き日を迎え、立派に成長されたお子様の姿に感慨もひとしおのことと存じます。教職員一同、心よりお喜びを申し上げます。これまで本校にお寄せいただきました御支援、御協力に、ここに改めて深く感謝を申し上げますとともに、今後とも本校の教育に益々のお力添えを賜りますようお願いを申し上げます。

結びに、卒業生の皆さんの前途に幸多からんことを祈念いたしまして、はなむけの言葉といたします。